

|         |                                    |
|---------|------------------------------------|
| 漢法苞徳塾資料 | No. 133                            |
| 区分      | 治療論・各論                             |
| タイトル    | 傷寒の治療と温病の治療の相違<br>『傷寒論鍼灸配穴選注』単玉堂より |
| 著者      | 八木素萌                               |
| 作成日     |                                    |

◇傷寒は病が表にあるものであるから發表法（発汗法）を行う治療が主なものとなる。（傷寒の裏証とは表証が侵入して行ったものである～主に陽明病である）しかし温病は病が裏（陰血）にあるものであり、温病の表証と言っても、それは本来の裏証が表に浮越したものであるから、温病の治療法は清裏を行なうことが主なものとなる。

◇温病の基本的な治法は「清熱生津」である。従って手の陽明の原穴「合谷」を刺して裏の蘊熱を清まし閉竅を開宣する。さらに「外関」穴（少陽三焦の絡穴・八宗穴のひとつで陽維脈に通じ陽維脈の治療穴）を配する。「外関」穴は三焦の「気機」を良く調暢するものである。この二穴はともに裏熱を瀉して清まし鬱を開いて邪を除く。そして更に「大椎」を用いる。この「大椎」穴は「督脈」に属しており手足三陽脈との会穴であるから、諸陽経の経気を良く宣通させて鬱を開き、邪を除くものである。「外関」・「合谷」はこの大椎の作用を良く佐ける。三穴はともに瀉法に刺す。次に胃経の合穴「三里」を取穴する。「三里」は津と血を生む源である胃土を調えるので、五行論に言う「母は子を生む～土は金を生じる」と言う理によって、土を培って金を生ぜしめる。また更に「太谿」穴を配する。「太谿」穴は腎経の原穴であり陰を養い、水を旺んにして津液を上輸させるのである。

◇もし誤って汗法を用いた為に「風温」が変証をひき起こすと、脈は陰陽ともに浮となり自汗が出、「身重」「多眠」となって軀をかき、声語を発することが難しくなる等々と言った。「温邪内熾・風火交煽」（内鬱した温邪の熱が熾んになり、それが丁度、風が火を煽りたて、また燃え盛る火が風を勢いづける様）の状態となっているもの。これには「足の臨泣」と「外関」とをセットにして用いる。「臨泣」は胆経の兪木穴・「外関」は三焦経の絡穴で、八法の主客相応の用穴として、胆熱を清まし三焦を利用して「熄風活絡」させて腹胸の間にある鬱熱を通瀉する。これらの穴の他にさらに肺腧と合谷とを加えて、肺の肅降作用を扶ける。それによって肺熱を清まし表の鬱を解散し表の状態を解理させるのである。

◇もし肺熱が心包に逆伝している場合には、心包経の井穴「中衝」を点瀉し、次いで原穴「大陵」と心経の絡穴「通里」を取穴する。熱を瀉して心気を疎通させ鎮静（安神）せしめるのである。

◇もし下法を行った為に、小便不利や直視失溲するに至ったり、或はまた津液が内渴するに至った為に腎水も耗損されるから失溲さえも不能になっている為に小便不利となったもの等々。これには腎水を旺んにして陽光（＝熱）を制すると言う目的で、「腎腧」と「太谿」（腎経の原穴）とを取穴して補腎して、滋陰壯水を図る。更に「復溜」（腎経の経金穴・母穴・補穴）を取穴して、その生津作用と、金性

穴の肺に作用する性質とを用いる。それによって肺熱を冷まし、肺を潤してやる。これ等に「三陰交」を配して三陰を補調する。

◇もし火（＝熱）を被った為に皮膚の色が微かに黄色を発したり、劇しい場合には「驚癇」の様であり、そして時に痙攣したりする。この状態は「火邪」が心を焚きあぶって身神喪失している危険にあるものである。故に十二井穴を点瀉し出血させて火熱を導いて身熱を清ますと言う救急措置を先ず施し、次いで「神門」（心経の原穴）と「内関」（心包経の絡穴）を取穴して通脈活絡せしめるのである。こうして火邪を除き心気を収斂させて「驚癇」を落ち着かせる。この様な症候の場合に若し火で薫じると邪熱を扶けると言う過ちを犯すので、病の邪実を加重する事になる。故に必ず亡血亡陰させて命期を促がすものである。従ってこの様な実証・熱証には万に一つも灸をしてはならない。

#### 注

- ・〈閉竅〉……ここは陽明病であるから便秘を意味している。
- ・〈気機〉……ここは三焦経の経気の気であり「カラクリ」「作用する仕組み」の「機」である。
- ・〈会穴〉……交会穴とも言う、複数の経脈の気機が交叉している穴。
- ・〈八法の主客相応〉……八宗穴の定められているセットでの用穴。
- ・〈痙攣〉……ここでは熱性痙攣。
- ・〈驚癇〉……「急驚風」とも言う、脳性症状によるヒキツケ等の癲癇様の状態、脳膜炎の類。此处では「～の様であり」と言っている様に高熱の為に脳性症状を起こしている事を表現している。
- ・〈通脈活絡〉……経脈を疎通し経も絡も活性化させる事。
- ・〈解理〉……理は「スジメ」「腠理ノ理」である、つまり腠理の状態を解きほぐし整えること。
- ・〈脈は陰陽ともに〉……この陰陽は寸と尺を指している。  
脈口の寸の部は陽を候がい、尺の部では陰を候がう。それで此の様に記述する。
- ・〈熄風活絡〉……「風」を静め経絡を活性化するとの意。
- ・風池穴について……手足の三陽経と陽維脈・陽蹻脈の八脈が会する穴で、偏・正頭痛を主り、清熱散風の効がある。風府・風池の二穴は全ての陽経が経過する穴であり、傷寒の百病を治す、共に瀉法に刺す。